九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ディベーターを対象とした新聞利用傾向が思考力に与える影響に関する考察

上土井，宏太
九州大学附属図書館

https://hdl.handle.net/2324/4783632

出版情報：The Bulletin of the Japan Society of Studies in "Newspaper in Education". 16, pp.19-27, 2021-03-31. Japan Society of Studies in "Newspaper in Education"
バージョン：
権利関係：

ディベーターを対象とした新聞利用傾向が思考力に与える影響に関する考察

A Study on Newspaper Uses of Debaters and its Effects to their Thinking

上土井 宏太
Kota JODOI
（九州大学）

1. はじめに

1.1 批判的思考力

批判的思考力については様々な定義がなされているが、最も一般的に用いられるのは「何を信じ、何をすべきか判断するための合理的・反省的思考」(Ennis, 1987) という定義であり、正しい情報、間違った情報が溢れている現在の情報化社会を生き抜く上で重要な能力とみなされている。

教育現場においても、2016 年に開催された「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会」において、批判的思考力（クリティカルシンキング）に関して、以下の言及が見られる。

> 急速に情報化が進展する社会の中で、情報や情報手段を主体的に選択し活用していくために必要な情報活用能力、物事を多面的・多角的に吟味し見定めていく力（いわゆる「クリティカルシンキング」）、統計的な分析に基づき判断する力、問題を見いだし解決に向けて思考するために必要な知識やスキルなどを、各学校段階を通じて体系的に育んでいくことの重要性は高まっていると考えられる。(文部科学省, 2016)

このように、批判的思考力は重要な能力とみなされている一方で、教育方法についての確立したメソッドはなく、様々な方法が検討されている。

新聞を用いた批判的思考教育に関する報告については、後藤 & 丸山 (2009) が新聞を含む教材を用いてメディアリテラシー育成に関する考察を行っている。また、後藤 (2014) は、大学生及び教員を対象に行った調査で、批判的思考力が高い者は、情報を得るための手段として、新聞や図書を優先する傾向があったことを報告している。

一方で、論理的思考の自覚や客観的な態度は、メディアリテラシーとの関連性は低いという報告もなされている（時田, 安井, & 佐藤, 2019）。

1.2 ディベートと批判的思考力

批判的思考力を向上させるための一つの有力な手段としてディベートが挙げられる。ディベートとは、「ひとつの論題に対し、2 チームの話し手が肯定する立場と否定する立場とに分かれ、自分たちの議論の優位性を聞き手に理解してもらうことを意図したうえで、客観的な証拠資料に基づいて議論をするコミュニケーション形態」 (松本, 1996) と定義され、自分の意見と離れて議論を客観的に行うことで、批判的思考力が高まると考えられる。

Tous, Tahriri, & Haghighi (2015) は、学生がディベートを経験したことで、批判的思考力が向上したことを報告している。また、ディベーターを対象として行ったインタビュー調査で、批判的思考力が身についたと感じる学生が多くいたことも報告されている (上土井, 2019) 。

学習指導要領においても、平成元年に改定された平成 6 年施行のオーラル・コミュニケーション C でディベートが本格的に導入され教科書に登場して以降、最新の平成 30 年 7 月の告示の高等学校学習指導要領外国語編・英語編においても、ディベート活動の重要性が記されている (朝美, 2018) 。また、小学校・中学校・特別支援学校においては、学習指導要領に明確な記載はないものの、主体的・対話的で深い学びを目指して、指導方法として取り入れている事例が見られる (横須賀, 2016; 福丸, 2019) 。

1.3 学生の新聞利用状況

総務省が令和2年度に行った「情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」によると、平日の新聞閲読時間は、全世代平均が8.4分に対して、10代は0.3分、20代は1.8分と低い値となっている。また、情報収集に利用しているテキスト系ニュースサービスを尋ねた調査結果では、紙の新聞を利用している割合が、全世代では49.2%であるのに対して、10代は23.2%、20代は21.3%と低い値となっており、若年層が新聞を情報収集の手段として使う頻度が少なくなっていることを示している (総務省情報通信政策研究所, 2020) 。さらに、大学生を対象に行なった調査では、新聞から情報を得ている学生は1割以下〜2割であったことも報告されている (皆川, 2015; 見尾, 2013) 。

また、平山 (2015) は、大学では、新聞が教材あるいは参考資料として日常的に使われているが、小中高で見られるような活用に準じた使い方はまだ広まっていないと指摘している。

海外の状況に目を向けるとインドの大学生341名を対象に新聞利用について調査を行い、58%の学生が新聞閲読にかける時間は1〜2時間であることを明らかにしてた報告がなされている (Kumar, Singh, & Siddiqui, 2011)。また、バングラデシュでは、大学生150名を対象に調査を行い、48%の学生が1日あたり1〜2時間新聞を読むこと、43%の学生は4紙以上の新聞に目を通しているという報告がある (Akanda & Haque, 2011)。

各国のインターネットインフラの整備状況や新聞への見方も異なるため単純比較はできないが、海外の学生と比べて日本の学生が新聞に接する時間は比較的少ないと言える。

1.4 リサーチクエスチョン(RQ)の設定

以上のような背景を踏まえて、批判的思考力が比較的高いと考えられているディベートを経験している学生（ディベーター）を対象とし、新聞利用の有無と批判的思考力の関係を調査することを目的として、次のRQを設定した。

RQ1: ディベーターは、どの程度情報収集において新聞を利用しているのか。

RQ2: ディベーターは新聞というメディアに対してどのような意識を持っているのか。

RQ3: 新聞利用の有無によって批判的思考力に差はあるのか。

上記3つのRQに関する分析を通して、ディベーターの新聞利用の状況を調査すること、利用の有無によって批判的思考力に何らかの差異が見られるか分析を行うことが本研究の目的である。

2. 実験概要

2.1. 被験者情報及び実験手法

A大学の英語研究会（English Speaking Society: ESS）に所属する学生19名を対象として、アンケート調査及び批判的思考力のテストを行った。

批判的思考力を測定するテストとして、ワトソン・グレーザー批判的思考力テスト (Watson & Glaser, 1964) や、その推論部分を翻訳したテスト (久原, 井上, & 波多野, 1983) が挙げられるが、本研究では、オンラインで受講可能で、批判的思考力、協働的思考力及び創造的思考力を測定することができるテストとして、株式会社ベネッセ i-キャリアが実施している GPS-Academic[1]を選択し、被験者に受験してもらった。GPS-Academic で測定している能力とその判定基準はルーブリックとして公開されている[2]。GPS-Academic では、テストの結果により客観的に能力を測定することに加えて、各能力に関する自己評価も同時に行っている。自己評価については、批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力をそれぞれ2つのサブセットに分割して、非常に自信がある、自信がある、どちらともいえない、あまり自信がない、全く自信がない、の5段階で回答する形式である。サブセットの質問内容を表1に示す。

---

[1] GPSアカデミックは選択問題と記述問題から構成されており、それぞれの結果によって総合的に批判的思考力がS~Dの範囲で判定されるが、問題例などは公開されていないので本論文中では記載していない。

[2] GPS-Academicの評価に用いるルーブリックはhttps://www.benesse-i-career.co.jp/gps_academic/exam/img/can-do.pdf（2020年11月8日閲覧）で公開されている。

2.2 アンケート内容

GPS-Academic のテストを受講した後、被験者にウェブ形式でアンケートを実施した。アンケートの設問と回答選択肢を表 2 に示す。

表 1. GPS-Academic の自己評価の質問内容

カテゴリー		能力のサブセット
批判的思考力	1	情報を抽出し吟味する力
	2	論理的に組み立てて表現する力
協働的思考力	3	他者との共通点・違いを理解する力
	4	社会に参画し人と関わりあう力
創造的思考力	5	情報を関連づける力・類推する力
	6	問題を見いだし解決策を生み出す力

表 2. アンケートの設問と選択肢

	設問	選択肢
1	新聞はどのくらいの頻度で読みますか。	1. 毎日 2. 2〜3 日に 1 回 3. 1 週間に 1 回 4. 読まない
2	新聞は平均で何分ぐらい読みますか。	数字で回答
3	新聞は購読していますか。	1. はい 2. いいえ
4	(設問 3 でいいえと答えた場合) 新聞を読む(買う)ときはどこに行くことが多いですか。	自由記述
5	新聞に関するイメージを自由に書いてください。	自由記述
6	新聞はクリティカルシンキング向上のために役に立つと思いますか。	1. はい 2. いいえ
7	新聞、雑誌、テレビ、インターネットのサイト、SNS を情報の信頼度が高いと思う順に 1 から 5 まで選択してください。それぞれの媒体の種類は、自分が思いつくもので結構です。	1〜5 を選択
8	今最も頻繁に使っている情報入手ツールは何ですか。	自由記述

3. 結果と考察

3.1. 新聞閲読傾向と新聞に対する印象

表 2 で示したアンケート項目のうち、設問 1、2 の回答結果を図 1、2 に示す。

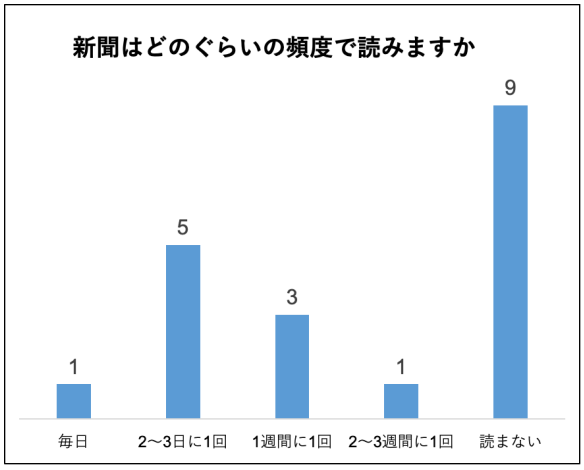

図 1. 設問 1 に対する回答結果

図 1 に示すように、新聞を読んでいない学生が 9 人(47%)で、読んでいる学生は 10 人(53%)となり、ほぼ同じ割合であった。1.3 で示した調査では、10 代、20 代の新聞利用率は約 20%であったことを考えると、ディベーターが新聞を利用する傾向は平均より高いことが分かる。

次に、新聞を読む平均時間を尋ねた設問 2 の結果を図 2 に示す。

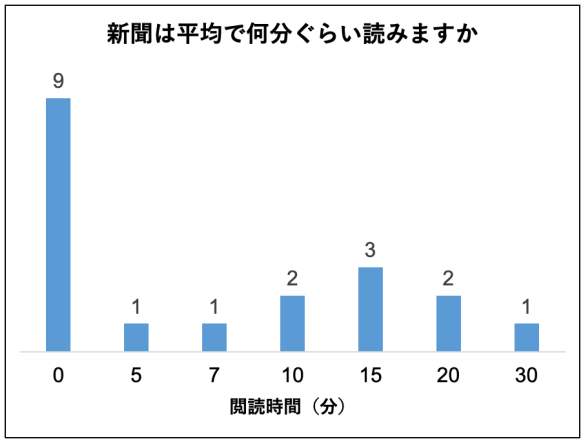

図 2. 設問 2 に対する回答結果

1 日あたりの平均閲読時間で最も多かったのが 15 分、最長が 30 分であった。全体の平均は 7.7 分であり、これも 1.3 で示した総務省情報通信政策研究所の調査と比較しても高い値となった。30 分と回答した学生は、日本経済新聞を購読しており、研究室で読むことが多いと回答していることから、研究をする傍ら、空いた時間で新聞を読むことで、新聞の閲読時間を確保していると考えられる。

次に、新聞の購読傾向について尋ねた質問 3 と 4 の結果を図 3、4 に示す。

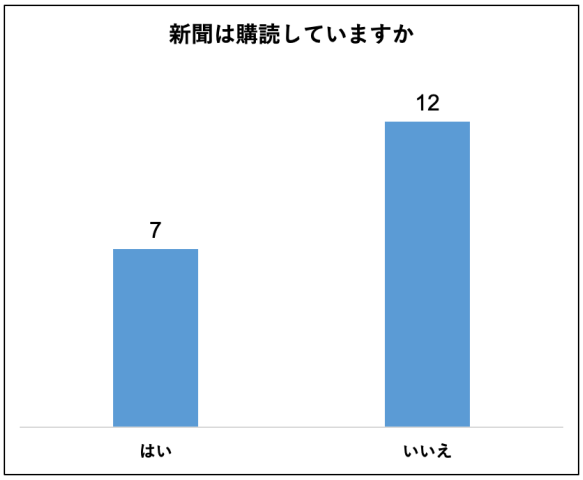

図 3. 設問 3 に対する回答結果

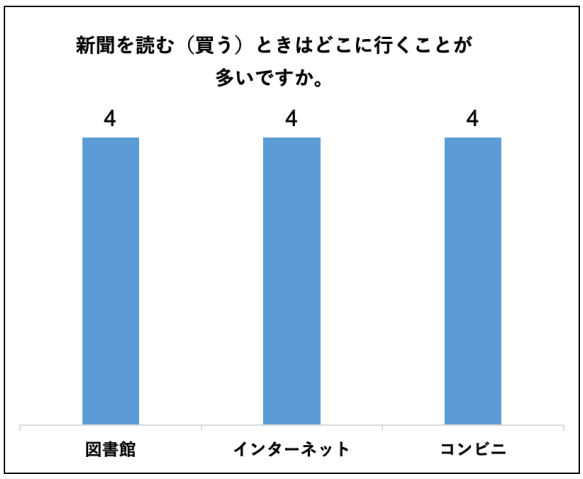

図 4. 設問 4 に対する回答結果

図 3 より、新聞を購読している人は 7 人(36.8%)であった。購読していないと答えた 12 人に、どこで新聞を読む(買う)ことが多いか尋ねたところ、図書館・インターネット・コンビニがそれぞれ 4 人ずつという結果となった(図 4)。

新聞を購読している 7 人のうち、実家でも新聞を購読していたのは 6 人(うち 2 人は調査時点でも実家暮らし)で、残りの 1 人は、大学の授業で教員が新聞を購読するよう強く薦めたことが購読を始めるきっかけだったと回答している。また、購読する新聞を決める際には学生に対する割引が用意されていること、論調が中立的であることを重視したとも回答している。このように、実家での購読の有無と

大学での周囲（特に教員）からの働きかけが、大学に入ってからも新聞を購読する要素だと考えられる。また、「新聞を購読していない」と答えた学生 12 人のうち 6 人は「実家では新聞を購読していた」と答えていることから、大学に入学して一人暮らしを始めるタイミングで新聞への接触が少なくなる学生が多い傾向も明らかとなった。

次に、新聞に対するイメージを聞いた結果をポジティブな内容とネガティブな内容に分類してまとめた結果を表 3 に示す。

ポジティブな印象として、「情報の質が高い」、「信頼性がある」、「社説やコラムのような新聞特有のまとまった記事が役に立つ」といった意見が見られた。一方、ネガティブな印象としては、「他のメディアと比べて速報性に劣る」、「読み方が分からない」、「内容が偏っている」などの意見が挙げられた。

ネガティブなイメージの回答の中にも、新聞自体の有効性は認識している回答が見られたため、より広く大学生に新聞を利用して情報を手に入れてもらうためには、速報性に劣る点などの新聞の短所を上回る長所が存在することを伝えることが重要であると考えられる。例えば、これまで新聞を読んでこなかった層に向けて、新聞の基本的な使い方・読み方を伝える講座を大学で開くことなどが一例として考えられる。また、意見が偏っているという印象に対しては、新聞記事ができるまでの過程をクリアにすることで、ネガティブな印象を多少なりとも変えることができる可能性がある。

表 3. 設問 5 に対する回答結果

ポジティブなイメージ	ネガティブなイメージ
● 読めばためになる ● 新聞社によって意見に偏りがあるイメージ。そのため、幾つかの種類を読む必要があると感じる。また、テレビでの情報よりは質が高いというイメージである ● ネットよりも信頼できる情報源 ● 社会の理解に役立つ ● コラムの内容がためになる ● テレビや、ネットニュース等より、世の中のニュースを詳しく知れるイメージ ● 毎朝、最新の情報をインストールする機会。見出しから自分が気になる情報を取捨選択できる。ただし、出版社によるバイアスを考慮しなければならないメディア ● 字が多くて、読むことが面倒。でも、知識を得るためには読むべきだと思う ● 社説のように事実関係を整理した文章に特徴があると思います ● 信頼できる情報が手に入る	● 読んだらいいとわかってるけど、朝は苦手 ● 最新のニュースに対応しきれない ● 新聞の発行会社によって意見が偏っているイメージ ● 雑多な情報が載っていて、読みたいところがなかなか見つからないイメージ。紙が大きく読みにくいイメージ ● 紙がばらばらになって読みにくい。ただ、電子版で読むとしたらレイアウトは従来の、紙媒体と同じものが良い。 ● 買うのと捨てるのが面倒

次に、新聞とクリティカルシンキングの関係について尋ねた設問 6 の結果を図 5 に示す。

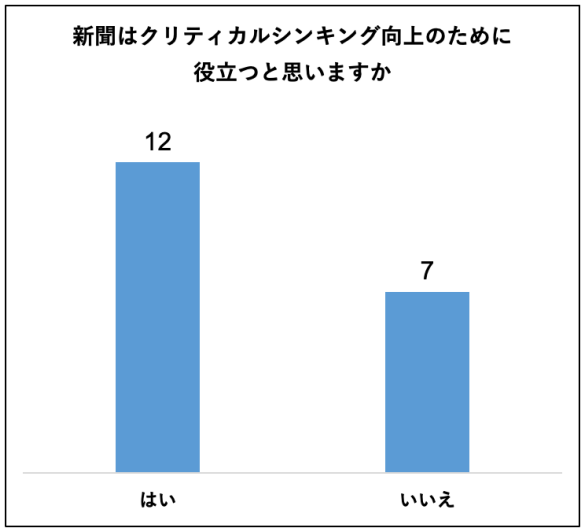

図 5. 設問 6 に対する回答

図 5 より、12 人(63.1%)の学生が新聞はクリティカルシンキングの向上に役立つと考えていることが分かる。皆川(2015)が実施している調査でも、調査対象の大学生の 9 割以上が「新聞を大学で使うことは役に立つ」と回答していることから、新聞の有用性については大学生も認識していることが本研究で改めて明らかになった。一方で、設問 6 で「はい」と答えた学生 12 人のうち、6 人は新聞を「読まない」と回答していることから、新聞を読むことでクリティカルシンキングが向上することは認識しているものの、新聞を読むという行動には繋がっていない。

3.2. 新聞に対する信頼度と学生の情報入手手段

設問 7 で、新聞、雑誌、テレビ、インターネット、SNS の 5 つについて、信頼度が高い順に 1 から 5 の数字を付けてもらった。それぞれの媒体につけられた数字の平均は、小さい方から、新聞(2.47)、雑誌(2.89)、テレビ(3.05)、インターネット(3.16)、SNS(3.74)となった。この数字が小さければ小さいほど、信頼度が高いと学生が感じていることを表しているので、新聞は情報源として信頼度が高いと認識されていることが分かる。

本調査においては、それぞれのメディアについて、どのようなものを思い浮かべるのか(例えば、インターネットであれば、官公庁のウェブサイトなのか、個人のブログなのか、Yahoo! Japan のようなポータルサイトなのか)によって、想定される信頼度も異なると考えられる。さらに、SNS についても、どのようなユーザーをフォローしているかによっても信頼度は異なると考えられる。これらに関する詳細な内容に関しては、今後の研究でインタビュー調査などを行うことで、明らかにしていく必要がある課題である。

設問 8 では、情報収集のために最も頻繁に使っているメディアを複数回答可で尋ねた。最も多かったのが SNS の 11 件(Twitter、Instagram、Facebook)とインターネットの 11 件(LINE ニュース、スマートニュース、Yahoo!ニュース、Google など)であり、新聞が 2 件(日経新聞アプリ、読売新聞電子版)、雑誌が 1 件(Newsweek)であった。新聞と回答した学生もいずれも電子版を利用していたことから、学生の多くは手軽に使用できるスマートフォンなどを利用して情報を入手している傾向が明らかとなった。また、新聞を日常的に読んでいるという学生の多くが新聞を主な情報入手手段として捉えていないという結果も明らかとなった。

3.3. 新聞閲読と批判的思考能力の関係性

GPS-Academic の結果と新聞閲読傾向の関係をまとめたものを表 4 に示す。2.1で述べたように、スコアは点数に応じて高い方から S, A, B, C, D で評価される。

GPS-Academic では、思考力として批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力を測定しているので、この 3 つについて考察を行う。

批判的思考力については、新聞を日常的に読んでいる学生と読んでいない学生の間で Student の t 検定を行ったが、統計的に有意な差は見られなかった。この原因として、今回調査対象となった学生は全て ESS に所属し、日頃からディベート活動を行っていることから、その活動を通して批判的思考力を十分に高めおり、新聞閲読の有無で十分に差がつかなかった可能性がある。

一方で、協働的思考力、創造的思考力についても、統計的に有意な差は見られなかったが、日頃

表 4. GPS-Academic での思考力の判定と新聞閲読傾向の関係

	新聞を読んでいる	S	A	B
批判的思考力	はい	4	5	1
	いいえ	7	2	0
協働的思考力	はい	7	1	2
	いいえ	3	4	2
創造的思考力	はい	6	3	1
	いいえ	2	6	1

表 5. 各能力の自己評価と新聞閲読傾向の関係

カテゴリー		能力のサブセット	新聞閲読	1	2	3	4	5
批判的思考力	1	情報を抽出し吟味する力	はい	4	4	0	2	0
			いいえ	1	4	3	1	0
	2	論理的に組み立てて表現する力	はい	5	5	0	0	0
			いいえ	3	6	0	0	0
協働的思考力	3	他者との共通点・違いを理解する力	はい	2	5	1	0	1
			いいえ	1	7	1	0	0
	4	社会に参画し人と関わりあう力	はい	3	3	2	2	0
			いいえ	2	6	1	0	0
創造的思考力	5	情報を関連づける力・類推する力	はい	3	3	1	3	0
			いいえ	0	6	1	2	0
	6	問題を見いだし解決策を生み出す力	はい	3	6	0	1	0
			いいえ	1	5	1	2	0

1: 非常に自信がある、2: やや自信がある、3: どちらでもない、4: あまり自信がない、5: 全く自信がない

から新聞を読んでいる学生の方が高いスコアを記録した。これは、日頃から新聞に目を通し、様々な立場の意見に触れることで、協働の重要性や創造性を育んでいる可能性が考えられる。例えば、新聞では地域社会における協働の事例が紹介されることがある他、社説やコラムでも多様性の重要性が述べられることがあるので、そのような記事を読むことで、協働の重要性を理解していったことが考えられる。また、新聞を通して政治・経済・スポーツ・教育など幅広いトピックに触れることで、様々な情報を収集し、それらを関連づける力が身についた可能性がある。これらの分析については、さらなる研究を通して妥当性を検証していく必要がある。

3.4 新聞閲読と批判的思考態度の関係性

2.1 で述べた各能力に対する自己評価の結果と、新聞閲読傾向の関係をまとめたものを表 5 に示す。

批判的思考力に関する自己認識については、新聞閲読の有無で統計的に有意な差を確認することはできなかった。これは、3.3 でも述べたように、ディベーターは日頃から批判的思考力を鍛える活動を行っており、批判的思考態度が必ずしも新聞閲読によって得られたと感じていないからだと考えられる。「論理的に組み立てて表現する力」に関しては、被験者全員が「非常に自信がある」又は「自信がある」と回答しており、この批判的思考態度の醸成に新聞閲読傾向がどの程度関わっているのか、本調査では十分に明らかにすることはできなかった。一方で、本当に批判的思考力を身に付けてい

る学生は常に物事を批判的に見ることから、自分自身の批判的思考力についても批判的に捉え、「自信がある」と回答しない場合が多いとも考えられるので、批判的思考態度の測定指標を分析する際には注意が必要である。

批判的思考力は批判的思考能力と批判的思考態度により構成され、それぞれの能力は独立した尺度であると明らかにされていることから、新聞閲読がどの程度批判的思考態度の醸成に関係するか明らかにすることは重要な研究課題である (平山, 田中, 河﨑, & 楠見, 2010) 。

今回自己評価を行った 3 つの思考力のうち、もっとも新聞閲読傾向で違いが見られたのは「創造的思考力」であった。この能力は「情報を関連づける力・類推する力」と「問題を見いだし解決策を生み出す力」のサブセットで構成されており、いずれも新聞を閲読している学生の方がより自信をもっている結果が得られた。3.3 でも述べたように、新聞は様々な分野の記事を扱い、その中で現状分析・問題点の整理を行っていることから、日ごろからそのような記事に触れている学生の方が情報の取り扱いに慣れており、問題点・解決策を考える機会も多く、新聞を閲読していない学生と比べて高い自信につながったと考えられる。

4. 結論と今後の展望

本研究では、ディベーターの批判的思考力と新聞閲読の関係をテスト、アンケート調査によって明らかにした。本章では、「1. はじめに」で設定した RQ に対する考察を中心に本研究のまとめを行う。

ディベーターは同世代の平均よりも新聞を読んでいる割合が高いことが分かり、ディベーターの新聞に対するイメージ、信頼性などの指標についても一定程度明らかになった。一般的に論理的思考や情報収集について高い関心があると考えられるディベーターの新聞に対するイメージや現状を明らかにすることで、今後、大学教育で新聞を活用する際の参考になると考えらえる。

ディベーターの新聞に対する意識について、雑誌やインターネットのサイト、SNS と比べて、新聞に対する信頼性が高いことは明らかになった一方で、新聞の使い方が分からない、という回答も複数見られた。今後は新聞をより活用してもらうため、新聞の読み方・使い方を大学生に教える機会を設けることで、より新聞に対するアクセスが容易になり、信頼できる情報を得ることができるようになると考えられる。

批判的思考能力及び態度と新聞閲読に関して統計的に有意な関連性を見出すことはできなかったが、新聞を読んでいる学生は協働的思考力・創造的思考力の指標が新聞を読んでいない学生を比べて相対的に高い値であったことから、これらの能力が新聞を閲読することで得ることができる能力の一部であることが示唆された。今後は更にインタビュー調査なども組み合わせることで、新聞による教育効果について更なる考察を行う予定である。

最後に、本研究の限界について述べる。本研究では、1 つの大学の ESS に所属するディベーターを対象に調査を行ったため、人数に限りがあり、必ずしも十分な被験者の数を確保することができなかった。このため、今回得られた結果もケーススタディの一つとして取り扱うことが適当であると考えられる。また、今回は「新聞」という枠組みで調査を行ったが、電子版の新聞や新聞社発信のネットニュース記事等が幅広く普及していることを考えると、それらの違いについて考察することも今後の課題である。

今後の研究として、より多くのディベーターを対象として調査を行うことや、大学の授業でディベートを扱った際に同様の調査を行うことで、更なる知見を得ることが可能となり、ディベーターの新聞利用状況と批判的思考力の更なる関係が明らかになることが期待される。また、ディベート経験のない一般の学生を対象として同様の調査を行い、新聞利用と批判的思考力の変化をより広く分析することも検討したい。さらに、海外の学生の新聞利用の状況についてより幅広く調査を行い、日本の学生との違いを比較検討することで、今後の新聞利用の在り方、教育方法について有益な示唆が得られることが期待される。

謝辞

本研究に協力してくれたA大学ESSに所属する学生及び研究をサポートして下さった九州大学大学院言語文化研究院 井上奈良彦教授に感謝いたします。

本研究はJSPS 科研費 18H01055 の助成を受けて実施されました。

参考文献

Akanda, A. K. M Eamin Ali & Haque, M. A. (2011) Young adults' reasons behind avoidances of daily print newspapers and their ideas for change. *Journalism & Mass Communication Quarterly*, 88(3), 597–614.

Ennis, R. H. (1987) A taxonomy of critical thinking dispositions and abilities. In J. B. Baron & R. J. Sternberg (Eds.), Teaching thinking skills: Theory and practice, 9–26. New York: W. H. Freeman and Company.

Tous, M. D., Tahriri, A., & Haghighi, S. (2015). The effect of instructing critical thinking through debate on the EFL learners' reading comprehension. *Journal of the Scholarship of Teaching and Learning*, *15*(4), 21–40.

Watson, G., & Glaser, E. (1964) Watson-Glaser critical thinking appraisal manual. New York: Harcourt Brace Jovanovich.

Kumar, D., Singh, R., & Siddiqui, J.A. (2011) Newspaper Reading Habits of University Students: A Case Study of Chaudhary Charan Singh University, India, *Library Philosophy and Practice (e-journal),* 470.

朝美淑子 (2018)「英語ディベート教育の実情:学習指導要領・教科書の分類を含めて」『大分工業高等専門学校紀要』55, 7-10.

久原恵子, 井上尚美, & 波多野誼余夫 (1983)「批判的思考力とその測定」『読書科学』27, 131-142.

後藤康志, & 丸山裕輔 (2009)「メディアに対する批判的思考を育成する教材パッケージの開発」『日本教育工学会論文誌』33, 89–92.

後藤康志 (2014)「批判的思考とメディア認知との関係の予備的検討」『日本教育工学会論文誌』38(Suppl.), 81-84.

上土井宏太 (2019)「パーラメンタリーディベートの教育効果と授業導入への提言」『基幹教育紀要』5, 29-42.

総務省情報通信政策研究所 (2020)「令和元年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」2020年11月8日アクセス（https://www.soumu.go.jp/main_content/000708016.pdf）

平山修平 (2015)『新聞記事を通じた「国際コミュニケーション」の学習方法 (II. 基盤教育院における実践)』『Obirin today : 教育の現場から』15, 89-103.

時田みどり, 安井宏, & 佐藤佐和子 (2019)「批判的思考態度とメディアリテラシーの関連性の検討」『日本心理学会第83回大会 発表論文集』910.

平山るみ, 田中優子, 河﨑美保, & 楠見孝 (2010)「日本語版批判的思考能力尺度の構成と性質の検討 :コーネル批判的思考テスト・レベルZを用いて」『日本教育工学会論文誌』33(4), 441-448.

福丸恭伸 (2019)「中学校における原発問題記事を教材化してディベート授業」『日本NIE学会誌』. 14, 45-48.

松本茂 (1996)『頭を鍛えるディベート入門』(ブルーバックス). 講談社.

見尾久美恵 (2013)「医療系短期大学生の新聞閲読アンケートに見る大学生の情報収集の動向」『川崎医療短期大学紀要』33, 1–7.

皆川晶 (2015)「大学生の新聞に対する信頼度と必要性－新聞を活用した授業を通して－」『崇城大学紀要』40, 153–164.

横須賀篤 (2016)「小学校理科×ディベート ディベートを利用してペットボトルのリサイクルの可否を考える」『授業力&学級経営力』. 54(12), 49-51.

文部科学省 (2016)『中央教育審議会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」2020 年 9 月 3 日アクセス（https://www.mext.go.jp/content/1377021_1_1_11_1.pdf）